

令和 8年 6月 29日

浜田市議会議長 渋谷 幹雄 様

議員名 西田 清久

## 研 修 受 講 報 告 書

下記のとおり研修を受講したので報告します。

### 記

1、研修名

第18回2026年度日本自治創造学会 研究大会  
人口減少下の新たな挑戦 ～住民に選ばれる魅力ある自治体を創る～

場所：明治大学アカデミーコモン棟3階アカデミーホール

2、受講の目的（市政との関連など）

人口減少と超少子化の進行する浜田市の人材不足を少しでも解消するためのヒントを、複数の講演や先進事例発表から吸収して市の政策に活かす。

3、期間

令和8年5月27日（水）～令和8年5月28日（木）

4、経費

63,871円

（経費内訳 受講料 15,000円、旅費 48,871円）

5、研修のポイント・議員活動や市政への反映など

都市と地方の人材をシェアする手法がいろいろあり、今後あらゆる場面で議員活動や地域づくりに活かせる。人材育成の考え方、事例を学ぶ。

6、研修内容

（詳細は次のとおり）

### 研修の概要

○ 講演

都市と地方をかきまぜる

”疲弊する都市と衰退する地域を同時に解決する”

高橋博之 氏（株式会社雨風太陽代表取締役社長）

- ・ 「関係人口」という言葉を創出した経緯と自治体の先進事例を非常に分かりやすく解説。



- ・ 愛知県豊田市の敷島地区（RMO；しきしまの家運営協議会）  
中山間地域に位置する敷島地区だが、地元の米生産者と消費者を結び、年間契約で米を供給する仕組みを運営している。2025年度時点で約330家族が参加し、約30トンの米を供給。
- ・ 福島県磐梯町の二地域居住の取組：磐梯町（人口約3200人）では、週末人口4000人を目指して（道の駅での副業など二足のわらじ）関係人口経営を行っている。

所感： 160年前の日本の人口構成は、石川、富山や新潟、愛知が上位だったが、戦後の集団就職列車によって東京に集中し始めたことが、現在の一極集中に繋がっている。当時移民した人たちの2世、3世も故郷難民となっており、こういった人たちをいかにして地方に呼び込むかの手法、考え方が大変参考になった。

## ○ 講演

持続可能な地域交通を目指す

～「交通空白」解消に向けた政策最前線～

原田修吾 氏（国土交通省大臣官房審議官）

- ・ 国土交通省「交通空白解消・集中対策期間」における取組方針2025の概要説明
- ・ 「交通空白」解消・官民連携プラットフォームについて
- ・ 「交通空白」解消等リ・デザイン全面展開プロジェクト（概要）
- ・ 「地域輸送資源のフル活用」の事例紹介
  - ① 複数の移動需要を路線バスに統合  
＜茨城県常陸太田市での運行効率化＞
  - ② 多様な主体の参画による地域公共交通の共創  
＜岐阜県白川町・東白川村での交通再構築による経費節減・利便性向上＞
  - ③ 部活の足から地域の足へ拡大  
＜奈良県平群町の地域総合スポーツクラブ＞
  - ④ システム活用による送迎車両の運用共同化  
＜群馬県みなかみ町のほか全国数カ所で同時実証＞

所感： 「交通空白」解消に向けた国土交通省の様々な政策についての事業説明と事例紹介があったが、地域の実情によってそれぞれの取組み方の違いは、浜田市としての参考になった。

また、持続可能な地域交通の取組は、省庁（文科省・厚労省）の枠を超えて地域の輸送資源（旅館のバス・スクールバス・・・）をフル活用する時代に入っていることを強く感じた。

## ○ 事例研究発表

空き店舗の再生で”若い世代が行きたくなるまちを創る”

高野慎吾 氏（元小諸市職員・高野不動産代表）

- ・ 「人が集まりたくなる田舎を創る」ことを目的に『おしゃれ田舎プロジェクト』を立ち上げ、単に移住者を増やすことなく、具体的な取組を行った。

- ・ 空き店舗や空き家と、開業・移住希望者をマッチングさせる
- ・ カフェや雑貨店、工房など地域の魅力を高める店舗を増やす
- ・ 新しく来た人と地元住民をつなぎ、孤立しないコミュニティをつくる。
- ・ イベントやマルシェを開催し、まちなかに人の流れを生み出す。
- ・ 行政だけでなく、商店主や事業者、市民が主体となって運営する。
- ・ 『小諸でお店を開業したい人』を募集し、東京（長野県アンテナショップ）でセミナーを開催した。（数人の参加者でもと思ったら、30人～50人来た）
- ・ 「おしゃれ田舎プロジェクト」は、見た目をおしゃれにすることが目的ではなく、「住みたい・働きたい・訪れたいと思われる地域を、人のつながりや新しい挑戦によって育てる」という地域活性化のこと
- ・ 現在では、30店舗以上が、開業している。

所感： 高野慎吾氏は、小諸市役所に14年間勤務し、その後実家の高野不動産を事業承継し、両方の経験（ノウハウ）を活かしながらオシャレなまちづくりを展開している。その根っこには、田舎をオシャレで元気にしたいという思いが溢れていた。前向きな人には、共感する人が集まってくると思った。浜田での人材育成の肝はこれだ！

## ○ 事例研究発表

### 公共空間に福祉の力とアイデアを使う”ゼロからのにぎわいづくり”

貞松 徹 氏（社会福祉法人ながよ光彩会理事長）

- ・ 長崎県長与町（人口33031人）の社会福祉法人『ながよ光彩会』は、令和7年度ふるさとづくり大賞最優秀賞（内閣総理大臣賞）を受賞した。

#### 評価された点

- 福祉職が地域の様々な場所で活躍する場を創出し、暮らしの安心・安全に向けたまちづくりに取り組んでいる。
- 新しい形の社会モデル。必要な人員を交通機関に依存するのではなく自分たちの手で解決しようという独自性を高く評価。就労支援としても「働く場」や「役割」を提供し、お互いを助け合うという地域のニーズにもフィットしており、今後の継続も期待される。福祉事業の枠に止まらず生活文化総合事業として展開している点は革新的。
- 社会福祉法人が無人駅の業務を担うという異例な取組が、福祉・教育・観光へと波及している点を評価。高齢化と人口減少が進む地域が増える中、高齢者介護に携わる事業者は各地にあり、他の模範にもなりうる。

- 地域づくりに福祉的な視点を欠かさず重要視している。
- 駅を単なる交通の拠点としてではなく、「福祉」「交流」「学び」の拠点として再定義しなおす本取組は、全国各地で応用可能な地域共生型の実践例。
- 地域住民のニーズに寄り添った素敵な駅。活動が多彩で、地域全体に福祉に対する新しい視座を与えており、「障がいのある方との接し方や考え方が変わった」という地域の声も評価。
- 無人駅増加など全国的課題に対しても、公共・福祉・観光を横断した持続可能なまちづくりモデルとして高く評価できる先導的事例。

所感： 『まちづくり』と一言と言っても内容は多彩だが、社会福祉法人ながよ光彩会理事長 貞松徹氏の広く・深く・ソフトで誰の心にも届きそうな考え方と活動に深く共感した。

浜田市にとっても、福祉分野の人材だけでなく、どの分野の人にも大いに参考になる。”百聞は一見にしかず”近い将来、視察に訪れてみたいと思った。

## ○ 事例研究発表

空き家の活用で”元気なまち”を取り戻す

大垣 満 氏（大和郡山まちづくり株式会社代表）

- 大和郡山まちづくり株式会社は、公民連携のまちづくりを進める団体として設立され、主に空き家を地域資源として再定義し、地縁を含め町全体をデザインしている。
- 大和郡山市は、リノベーションまちづくりを施策として推進するため、大和郡山城下町エリアを2019年9月、リノベーションまちづくり戦略を検討開始。そして2020年1月、第一回リノベーションスクール、2021年10月、第2回リノベーションスクール、2022年、リノベーションカレッジ等を開催し、城下町エリアの遊休不動産を活用した新たなまちづくりプロジェクト「大和郡山まちづくりプロジェクト」が誕生している。
- 空き家活用事例
  - ・ 町屋未来基地
  - ・ ワダマチテラス・コネクトスペース「cotton」
  - ・ 食と住の町屋「En-gawa」
  - ・ 柳町フラット ・ オカマチ荘 ・ 帰々-KIKI-

所感： 大和郡山市が、城下町エリアの空き家をリノベーションしながら”元気なまち”を取り戻すため、公民連携で豊かな未来を描き、挑戦する姿は非常に参考になった。

何よりも、大垣満氏のような思いを持った人をどう発掘し、どう見極めるか、浜田市に求められる重要な要素だと思う。